

「角田柳作記念文庫」(文庫27)について

金子 昌嗣(資料管理課長)

本誌No.74で既報のように(松下真也「『角田柳作展』について」) 創立125周年記念事業の一環として、図書館では角田柳作(1877-1964)の生涯と業績を顕彰する企画を準備している。すなわち、シンポジウム、展覧会、そして文庫の創設である(シンポジウムは10月30日、展覧会は10月20日~11月30日開催の予定)。このうち文庫については準備がほぼ整った。秋のイベントにあわせて公開の運びとなるが、その概要について紹介する(中央図書館地下1階研究書庫に配架予定。公開については、図書館ホームページ等であらためてお知らせします)。

角田柳作旧蔵書の本学への寄贈は、甲斐美和さんのご尽力により進められた。甲斐さんは、第二次大戦の末期からコロンビア大学で日本語資料担当の司書として活躍された。角田のもとで同大学の日本語資料収集に尽力し、米国でも有数の東アジアコレクションの礎を築いた(角田や甲斐さんの活動を含め、米国図書館における日本語蔵書の克明な歴史が、次の新刊書にまとめられている。和田敦彦『書物の日米関係：リテラシー史に向けて』新曜社、2007年2月)。角田没後にその個人蔵書の管理をまかされ、彼の母校である本学への寄贈について、早くも1966年ごろには当時の大浜信泉総長と書面でのやりとりがなされていた。実際の受贈がいつから始まったか、確たる記録は残っていないが、第一便は総長室に届けられたという。その後もご寄贈は続き、受領分の中には通常の寄贈書扱いで整理して書庫に収めたものもあったが、大部分は処理待ち資料として蓄積されていた。

甲斐さんからの寄贈は、近年も年数度(1回20~30冊ほど)というペースでほぼ絶えることなく続いた。そして2006年4月、図書館に届いた荷札には「最終」の文字が記されていた。受贈資料は1371冊(洋書1130、和書241)に及んでいる。なお、

研究書庫配架ずみのもも再整理して文庫に一括した。昨年5月、角田関連企画についての協力依頼のため、紙屋前館長ほか関係者(松下、中元)がコロンビア大学を訪れた際、甲斐さんにもお会いした。長年のご尽力へのお礼を述べるとともに、それが文庫設置に結実することを(文通ではすでにお知らせしていたが、あらためて)報告した。甲斐さんは大層のお喜びだったそうである。

角田旧蔵書の一部は、ご令嬢の星野富士子さんにも引き継がれていた(洋書129冊)。それについても星野さんのご快諾を得て、文庫に一括することができた。その結果、記念文庫は総計1450冊を数えるに至った。

文庫の特徴について簡単に触れると、ハワイ時代を含め55年に及ぶ滞米生活を反映して、英書が多い。いわゆる希覯本の類は見られず、角田が自身の研鑽や教育研究に用いたと思われる図書群である。主題としては、米国を中心とした欧米文化全般(歴史、文学、哲学等)にかかわるものが多い。また他方で、和書を含め日本文化関連の書籍も相当の量にのぼり、コロンビアでの日本学教育に活用したものと推察される。書き込みがなされた図書や、献呈本(ドナルド・キーンや暉峻康隆のサイン入りなど)もちらほら見られる。本に挟み込まれたメモ等も多少あり、それらについては文庫とは別に、特別資料室で保管、別途の利用に供することになる。

以上、角田柳作記念文庫の経緯と概略を紹介したが、もとより不十分なスケッチでしかない。興味を持たれた研究者・学生のみなさんには、公開後ぜひ直接研究書庫に足を運んで現物をお確かめいただきたい。最後になったが、本文庫生みの親である甲斐さんと、角田先生ご令嬢星野さんが、ともにご健勝でいらっしやることを祝し、あらためて深く謝意を表したい。